

目をさました母親のそばに、男の子の姿は見あたりませんでした。まるで煙のように消えていなくなっていました。「どなたか、わたしの子供をみかけませんか。どなたか、わたしの子供をみかけませんか。どなたか、わたしの子供をみかけませんか。」

「と、きちがいのようになつて母親は、湯治客一人一人にたずねましたが、だれもだまつて、首を横にふるばかりでした。」

やがて、心配のあまりとうとう気がちがつてしまった母親は、「じゅういち、じゅういち ……」と、ただつぶやくばかりでした。「十一才になる男の子」、このことばが、のろいのように頭にこびりついてはなれなかったのでしょうか。そして、再び

